

淨願寺山・稻荷山古墳群 分布調査概報

1973. 3

高松市教育委員会

目 次

1. 調査経過.....	1
2. 古墳一覧表.....	4
3. 主要古墳の概要.....	16

第一章 調査経過

1. 調査に至るまでの概要

高松市の基礎は、天正16年(1588年)豊臣秀吉の家臣「生駒親正」が讃岐の領主として、当時「宍原莊玉藻の浦」と呼ばれていた地に玉藻城を築城した時にはじまる。

生駒4代54年間の治政後、寛永19年(1642年)松平頼重(徳川家康の孫、水戸光圀の兄)が東讃岐12万石の領主として入国して以来、明治維新までの220年間領内の産業開発に努め、城下町として繁栄の一途をたどってきた。

明治維新を迎えた直後、香川県の所在地となり明治23年市制を施行、順次発展を続けつつあったが、昭和20年7月4日市街地の80%が戦じんに帰す空襲にあった。

戦後の動乱期を経て、積極的な復興が推進され、市街地の整備・拡大が促進されたが、これとともに新しい都市づくりのため順次市域を拡大して、人口28万人を数える四国の中枢管理都市「高松」ができあがった。

市域の拡大と市街地の拡大が順次進行され、市街地南西に近接する石清尾山・紫雲山等の山塊は市街地に浮かぶ孤島となり、山麓にも開発の事業が進行されることになった。

この山塊は、面積約6km²、標高約200m、石清尾山を主峰とする紫雲山・淨願寺山からなり、東の屋島(史跡・天然記念物)とともに瀬戸内海に臨む展望台となり、ハイキングコースにも指定されて市民に親しまれ、憩いの場として自然の好条件をそなえたところである。

松の木につつまれた丘陵には、築成が積石からなるもの、盛土からなるものなど多数の古墳が点在し、弥生時代の遺物が出土することから弥生遺跡としても知られていた。

点在する古墳群は石清尾山古墳と呼ばれ、安山岩を用いた積石墳丘は前方後円・双方中円・円などの形状をもち、盛土墳を含めると古墳は200余基を数え、古墳時代の遺跡として考古学上貴重な存在である。

高松市においては、自然環境に恵まれたこの地域が市街地に至近の位置にあるところから、かねてから市民のレクリューションの場として開発する構想をもっていたが、開発地区は石清尾山の峰々がのびて環状に連なる通称指鉢谷が平坦地に恵まれ、しかも展望地に最適であるため選定され、蜂山開発計画が策定された。

開発実施に先だって、開発計画の公共的性格からして峰山地区一帯に点在する大小古墳群のうち開発対象区域内の遺跡の分布状況について調査の申し出があった。(昭和43年12月)これにより、昭和44年2月12日から同14日まで県・市文化財専門委員による実施踏査を行なった。

その結果、開発計画区域に点在する16基の古墳の所在を確認した。

これにもとづき遺跡保護の国民的課題に対処するため、文化財保護優先の立場に立った開発

計画策定を要望し了解を得るとともに、文化庁に対し石清尾山古墳群史跡指定の資料を提出した。

文化財専門家講会においては、すでに指定している「石船積石塚」に追加して、これらの古墳を「石清尾山古墳群」として指定することが内定した。(昭和45年3月) 指定決定に先立ち、指定の範囲ならびに遺跡の現況等の資料作成のため埋蔵文化財緊急発掘調査を実施することとなった。

この調査は、単年度100万円(国50万円、県17万円、市33万円)の予算をもって開始され、第1次(昭和45年度)、第2次(昭和46年度)に分け、市教育委員会が調査主体となり、県教育委員会(松本主事)の指導により、高畠知功氏を中心、四国学院大学(善通寺市)考古学研究グループの協力のほか、多数関係者の協力援助を得て実施することとなった。

調査場所の峰山地区は、標高150m～200m余、水源に恵まれず、交通不便などのため、調査従事者の往復の悪条件を克服するほか、調査期間の設定にあたっては、従事者の本務にさしつかえない時期を選ぶなどの制約をうけて実施した。

その調査概要は、既報の第1次・第2次調査概報のとおりである。

発掘調査終了に引き続き、峰山開発計画が想定する地域以外に存在する多数の古墳の分布調査をも実施することとなった。

この調査は、峰山開発計画の進行、山麓地帯の都市化現象などに対処する事前調査として実施するものである。

2. 調査経過

この調査は、国・県補助事業(予算100万円)として、稲荷山(通称紫雲山)および南側の淨願寺山に点在する古墳群の分布調査を行なうものである。

調査対象区域の山容は比較的急峻であるが、山麓から頂上へかけて緩傾斜するところは果樹園として開拓される部分が多く、近年になって住宅地として開発されるようになりつつある。

山林を形成する部分は、国有林を除くと急傾斜地となっている部分が多いが、生活の合理化・農業の省力化などによって、山林の下草等を堆肥あるいは家庭燃料とする風習が途絶えたため、山林部分はいうにおよばず、山道にも雑草が生い茂り、調査にあたり障害となることが予想された。

これらの自然的条件は、調査にあたり歩行の支障となるほか、遺跡の発見確認のための障害となるため、悪条件の少しでも緩和される落葉の季節を選んで調査するよう期間を設定したのである。

調査団の編成は、市文化財保護委員、その他(詳細別表調査団編成表)で編成し、原則としては調査員の本務外である日曜・休日を調査にあてるとした。

調査期間は、11月開始翌年3月末終了を予定し、自然の中に埋没した奥津城の所在をおって踏査をはじめた。地表面の起伏に注意をはらい草茂る樹間の道なき道を手すり手にくぐりぬけ、急峻をよじ登り、あるいは岩石墓々と山積する奥津城に立って展望を賞で、あるいは樹木にからまれて進路変更のよぎなきに至るなど、自然との戦いの中で変化に富んだ実施踏査であった。

本調査にあたり、京都帝国大学文学部考古学教室の実施した難波石清水山古墳の研究（略称：京大報告～昭和8年調査実施）を資料としたことはいうまでもないが、積石塚の場合、岩石のため樹木の生成が妨げられるため積石塚の確認が容易であるが、場所によっては自然に散在する石塊群があり、積石塚の破壊されたものと分別することが困難なものもあるが、盛上塚の場合、樹木の繁茂、下草の茂み、落葉の堆積などにおおわれるものが多く起伏する地表の状況によってわざかに所在を認めるものが多い。墳丘の主体部はほとんどの場合、破壊されて凹んだ状態にあり、石室の露出したものは原形を想定できるが、石塊が散乱して長い年月によってか土石によって埋没するものが多い。

今回の調査は分布調査であるが、遺跡の所在確認とその概要把握を目的としているため、墳丘の計測、石室の計測など現況把握に必要な資料等を得るべく的確な計測を実施することを希望するむきもあったが、調査対象となる遺跡があまりにも多いことと自然的悪条件の環境下にあるため、樹木の伐採、下草の除去など計測調査の前提条件として必要とするため、古墳の所在想定基準・調査範囲等を考慮して、所在古墳の確認と平面的な機略計測を行ない、淨願寺山頂に群集する盛上塚の墳丘間距離測定を実施したのである。

しかしながら、100余基にのぼる遺跡の保護と関係遺物の保存については、今後も調査を必要としており、緊急を要する課題となりつつある。

I 稲荷山古墳群

No.	名 称	所 在 地	所 有	地 目	立 地	墳 形			高さ
						形	面	半面計測	
50	稻荷山3号墳	宮脇町稻荷山	国 有	山 林	尾根鞍部	円 墳 (積石塚)	"	直径 9.00	1.00
51	" 2号墳	"	"	"	尾 棚	"	長径 15.00 短径 11.00	"	1.50
52	" 1号墳	室町紫雲山	"	"	尾根鞍部	"	直径 18.00	"	2.50
53	" 4号墳	"	"	"	"	"	直徑 8.00	"	2.00
54	稻荷山城塚	宮 脇 町 慶 庄 町	"	"	山 顶	前方後円墳 (積石塚)	全長 54.00 後円部 直径 24.00	"	4.00
55	稻荷山北堵古墳	宮 脇 町 稲荷山	"	"	尾根突端	円 墳 (積石塚)	長径 28.00 短径 20.00	"	2.50

J 野山古墳群

56	野山1号墳	西春日町 野山1063-126	私 有	畠	東面した傾斜地の丘陵上	円 墳	直径 12.00	3.50
57	" 2号墳	" 1063-129	"	"	"	"	直径 8.00	2.50
58	" 3号墳	" 1063	"	"	"	"	直径 8.00	1.50
59	" 4号墳	"	"	山 林	北東に向した尾根上の傾斜地	円 墳 (積石塚)	長径 7.00 短径 5.00	1.20

K 浄願寺山古墳群

60	浄願寺山1号墳	西春日町日 町 鏡田町東山1414	公 有	山 林	山頂の南面した傾斜地	円 墳	直径 16.00 短径 11.00	1.50
61	" 2号墳	"	"	"	"	"	直径 9.00 短径 6.00	1.50
62	" 3号墳	"	"	"	"	"	直径 22.00	2.00
63	" 4号墳	"	"	"	"	"	直径 10.00	1.50
64	" 5号墳	"	"	"	"	"	長径 9.00 短径 6.00	1.50

内部構造	石室主軸 (開口方向)	石室計測(cm)				遺物	現状
		全長	玄室	横道			
不明	不明	不明	不明	不明	不明	土師器	墳丘は泡乱を受けてほとんど失なっている。底盤部にもあたっているため残存部は少ない。
豊穴式石室	〃	〃	〃	〃	〃	不 明	馬頭盃を西半を切られ、中央部には盗掘跡あり。基底部は残存。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	〃	尾根道が墳丘中央部を通っているため変形を受けている。
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
豊穴式石室	〃	〃	〃	〃	〃	〃	山道が後円部の一部を削る。後円部、前方部に盗掘跡、前方部段築崩壊しかけている。
不明	〃	〃	〃	〃	〃	〃	山道が墳丘を横切り、段築も崩壊しているが、基底部は残存。

横穴式石室 (片袖式)	N-16°-E (南)	635 以上	長 310 巾 210 高さ 105以上	巾 85 高さ 105以上	不 明	側面化のため埴丘の周囲は削られ石室の瓦壁、底盤部先端は破壊。
〃	N-17°-E (南)	440 〃	長 320 巾 160 高さ 150以上	巾 100 高さ 100以上	〃	〃
横穴式石室	N-16°-E (南)	500 〃	巾 102 以上	不 明	〃	開墾のため盛土は尖らない、石室と埴丘部を残すのみ。
豊穴式石室	不 明	不 明	不 明	〃	土師器片 (外装)	荒廃し、中央部に盗掘跡がみられる。

不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	埴丘中央部は深くえぐられ石が露出している。畠の境界の跡が埴丘を横断。
横穴式石室 (両袖式)	N-42°-W (南東)	560 以上	全長 405 巾 135	巾 75	〃	〃	埴丘中央部は深くえぐられ石室基底部が露出している。
横穴式石室	〃 (〃)	推定 800以上	全長 400 巾 228	不 明	〃	〃	埴丘中央部は削られ石室基底部が露出、底盤先端は破壊されている。
横穴式石室 (両袖式)	N-18°-W (南東)	655 以上	巾 235	巾 140	〃	〃	〃
横穴式石室	N-36°-W (南東)	推定 600以上	巾 150	不 明	不 明	〃	〃

No	名 称	所 在 地	所 有 者	地 目	立 地	填 地				計 測 高
						形	底	平 面	計 測	
65	淨願寺山6号墳	飯田町東山1414	公 有	山 林	山頂の南面 した傾斜地	円 墳		直 径	7.00	0.50
66	〃 7号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長 径	13.00	1.50
								短 径	10.00	
67	〃 8号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	10.00	1.00
								〃	8.00	
68	〃 9号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	8.00	1.20
								〃	7.00	
69	〃 10号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円 墳 (空 墳)	〃	11.00	2.70
								〃	8.00	
70	〃 11号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円 墳	〃	12.00	1.50
								〃	8.00	
71	〃 12号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	10.00	1.50
								〃	8.00	
72	〃 13号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	直 径	9.00	1.50
73	〃 14号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長 径	8.00	1.50
								短 径	7.00	
74	〃 15号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	8.00	1.00
								〃	6.00	
75	〃 16号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	直 径	7.00	0.50
76	〃 17号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9.00	1.20
77	〃 18号墳	〃	共 有	〃	南面した 錐 針 尖 (山 頂 部)	〃	〃	〃	7.00	1.50
78	〃 19号墳	飯 田 町 東 山	〃	〃	〃	〃	〃	長 径	10.00	1.20
								短 径	9.00	
79	〃 20号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9.00	2.00
								〃	7.00	
80	〃 21号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	10.00	1.50
								〃	7.00	
81	〃 22号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	9.00	1.00
								〃	7.00	
82	〃 23号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	直 径	7.00	1.20

内部構造	石室主種 (開口方向)	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	横道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	墳丘は削平されている。
横穴式石室	推定 N-12°-W	〃	〃	〃	〃	墳丘は削平され、石室の用材が露出している。最下部は残存しているらしい。
不明	不明	〃	〃	〃	〃	墳丘中央部に大きな盗掘跡あり。
横穴式石室	推定 N-20°-W	〃	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘跡あり。石室の用材が若干露出。
"	N-16°-W (南)	740以上	長 巾 高 355 160 160	中 100 110以上	〃	墳丘の周囲は若干削られ痕跡の先端部は破壊されているが、本古墳群中保存度は最も高い。
横穴式石室 (片袖式)	推定 N-20°-W	推定 700以上	不明	不明	〃	墳丘中央部に石室の用材が散乱している。
横穴式石室	推定 N-28°-W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘跡あり。
"	推定 N-20°-W	推定 750以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に石室の用材が露出、基底部は残存。
"	推定 N-10°-W	推定 600以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘跡あり。
"	推定 N-22°-W	推定 650以上	〃	〃	〃	墳丘中央部に盗掘跡あり。石室の用材が露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	わずかな盛りあがりをみせる。
横穴式石室	N-16°-W	推定 700以上	〃	〃	〃	中央部に盗掘跡あり。
"	N-18°-W (南)	450以上	〃	〃	〃	盗掘を受け石室の用材である安山岩の石塊が露出。痕跡部先端破壊。
"	N-14°-W (南)	650以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に天井石らしきもの露出。
不明	不明	不明	〃	〃	〃	比較的保有良好。
横穴式石室	(南)	750以上	〃	〃	〃	盗掘を受け玄室部の天井石が露出。
"	推定 N-30°-W	推定 620以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部に石室の用材が散乱。
横穴式石室	推定 N-16°-W	推定 727以上	〃	〃	〃	盗掘を受け、中央部の石室の用材が散乱。

No.	名 称	所 在 地	所 有 者	地 目	立 地	墳 形				面 積		計 測 高さ	
						南側した傾斜地 (山頂部)	円	墳	直径	8.00	1.20	"	"
83	淨順寺山24号墳	飯田町東山	共 有	山 林					長径	9.00	1.50		
	" 25号墳	"	"	"	"				短径	7.00			
85	" 26号墳	"	"	"	"				長径	12.00	2.50		
86	" 27号墳	"	"	"	"				短径	9.00			
87	" 28号墳	"	"	"	"				直径	8.00	1.00		
88	" 29号墳	"	"	"	"				長径	9.00	1.20		
89	" 30号墳	"	"	"	"				短径	7.00			
90	" 31号墳	"	"	"	"				長径	11.00	2.00		
91	" 32号墳	"	"	"	"				短径	9.00			
92	" 33号墳	"	"	"	"				長径	11.00	2.50		
93	" 34号墳	"	"	"	"				短径	9.00			
94	" 35号墳	"	"	"	"				長径	7.00	1.00		
95	" 36号墳	"	"	"	"				短径	6.00			
96	" 37号墳	"	"	"	"	山頂の南東に面する斜面			直径	6.00	1.00		
97	" 38号墳	西春日町南山浦	"	"	"				長径	10.00	1.50		
									短径	8.00			
98	" 39号墳	"	"	"	"				直径	7.00	1.20		
99	" 40号墳	"	"	"	"				長径	9.00	1.20		
10	" 41号墳	"	"	"	"				短径	7.00			
									直径	8.00	1.00		

内部構造	石室主輪 (開口方向)	石室計測(cm)			遺物	現状
		全長	玄室	横道		
不明	不明	不明	不明	不明	不明	かって傾てあったため相当荒廃している。
横穴式石室	N-10°-E	580 以上	"	"	"	墳丘中央部盗掘孔あり。石室の用材散乱。
"	N-2°-W	810 以上	巾 140	"	"	巨大な安山岩の天井石が動かされ石室が露出している。
"	N-24°-W	推定 560以上	不明	"	"	かって傾てあったため墳丘は削平され石室基底部が露出。
"	N-33°-W (南東)	不明	"	"	"	"
不明	不明	"	"	"	"	比較的保有度良好。
横穴式石室	N-8°-W	700 以上	巾 155	"	"	盜掘を受け石室露出。
"	N-26°-W	620 以上	推定 巾 135	310	"	盜掘を受け石室露出。
横穴式石室 (調査式)	N-36°-W	推定 810以上	不明	"	"	盜掘を受け石室露出。
横穴式石室	不明	不明	"	"	"	天井石らしきもの露出している。
"	N-0° (南)	680 以上	巾 133	"	"	盜掘を受け石室基底部露出。
"	N-16°-W	580 以上	不明	"	"	盜掘を受け、石室の用材散乱。
"	N-20°-W	780 以上	巾 155	"	"	盜掘を受け石室露出、横道部先端破壊。
"	N-16°-W	550 以上	不明	"	"	盜掘を受け石室散乱。
"	N-0° (南)	750 以上	長 巾 380 150	80	"	盜掘を受け石室露出、横道部先端破壊。
"	N-20°-E	550 以上	不明	不明	不明	盜掘を受け石材散乱。
"	N-0° (南)	推定 660以上	"	"	"	
"	推定 N-28°-W	不明	"	"	"	中央部に盜掘孔あり。

No	名 称	所 在 地	所 有	地 月	立 地	墳 形			高さ
						形	態	平 面 計 測	
101	淨願寺山42号墳	西春日町南山浦	共 有	山 林	山頂の南東に面する斜面	円 墳	直 径	8.00	1.20
102	" 43号墳	"	"	"	"	"	長 径	10.00	
							短 径	8.00	1.20
103	" 44号墳	"	"	"	"	"	直 径	7.00	1.20
104	" 45号墳	飯 田 町 東 山	"	"	"	"	直 径	9.00	1.00
105	" 46号墳	西春日町南山浦	"	"	"	"	直 径	7.00	1.20
106	" 47号墳	"	"	"	"	"	長 径	9.00	1.50
							短 径	8.00	
107	" 48号墳	"	"	"	"	"	長 径	8.00	1.20
							短 径	6.00	
108	" 49号墳	"	"	"	"	"	"	8.00	1.50
							"	6.00	
109	" 50号墳	"	"	"	"	"			1.10
110	" 51号墳	飯出町東山1423	"	"	山頂の台地	"	長 径	8.00	1.00
							短 径	6.00	
111	" 52号墳	"	"	"	"	"	"	7.00	1.00
							"	5.00	
112	" 53号墳	"	"	"	南面した傾斜面	"	"	10.00	2.00
							"	9.00	
113	" 54号墳	"	"	"	"	"	"	8.50	1.50
							"	7.00	
114	" 55号墳	西春日町南山浦	"	"	山頂南東部の突端	"	"	8.00	1.50
							"	8.00	
115	" 56号墳	飯 田 町 西春日町南山浦	"	"	尾根上の鞍部	"	"	8.00	1.20
							"	6.00	
116	淨願寺山57号墳	飯 田 町	共 有	山 林	尾根上小谷地	円 墳	直 径	8.00	1.20

し が め 塚 古 墳 群

117	が め 塚	勤 使 町 小 山	国 有	山 林	台 地	前 方 后 圆 墓	全 長 25.00	横 斜 面 2.50
							後 内 部 15.00	前 方 部 1.00

内部構造	石室主軸 (開口方向)	石室計測(cm)				遺物	現状
		全長	玄室	横道			
横穴式石室	推定 N - 10°- W	推定 550以上	不明	不明	不明		中央部に盜掘孔あり。
"	推定 N - 12°- W	推定 700以上	"	"	"		中央部に盜掘孔あり、石材散乱。
"	推定 N - 5°- W	不明	"	"	"		盜掘を受け石材散乱。
"	推定 N - 8°- W	"	"	"	"		盜掘を受け中央部に大きな穴あり。
"	推定 N - 4°- W	"	"	"	"		盜掘を受け石材散乱。
"	推定 N - 5°- W	"	"	"	"		盜掘を受け石材散乱。
"	N - 14°- W	推定 500以上	"	"	"		盜掘を受け天井石露出。
"	N - 5°- W	不明	"	"	"		盜掘を受け石材散乱。
不明	不明	"	"	"	"		石材散乱。
横穴式石室	"	"	"	"	"		安山岩の巨石が露出、地山の岩盤を識別が困難。
"	"	"	"	"	"		"
"	"	"	"	"	"		中央部に盜掘孔あり、石塊が散乱。
"	"	"	"	"	"		墳丘は削平され、原形をとどめている。
不明	"	"	"	"	"		墳丘上には石塊が散乱。
"	"	"	"	"	"		墳丘は大半を失ない、内部構造も失なっている。尾根道が墳丘を横断。
"	"	"	"	"	"		中央部に若干のくぼみがあるが、比較的保存度良好。

不明	学校の校地内にある。後円部に給水塔が建ったため後円部は削され前方部の盛土も削られ基底部を残して破壊。						
----	----	----	----	----	----	----	--

M 片山池古墳群

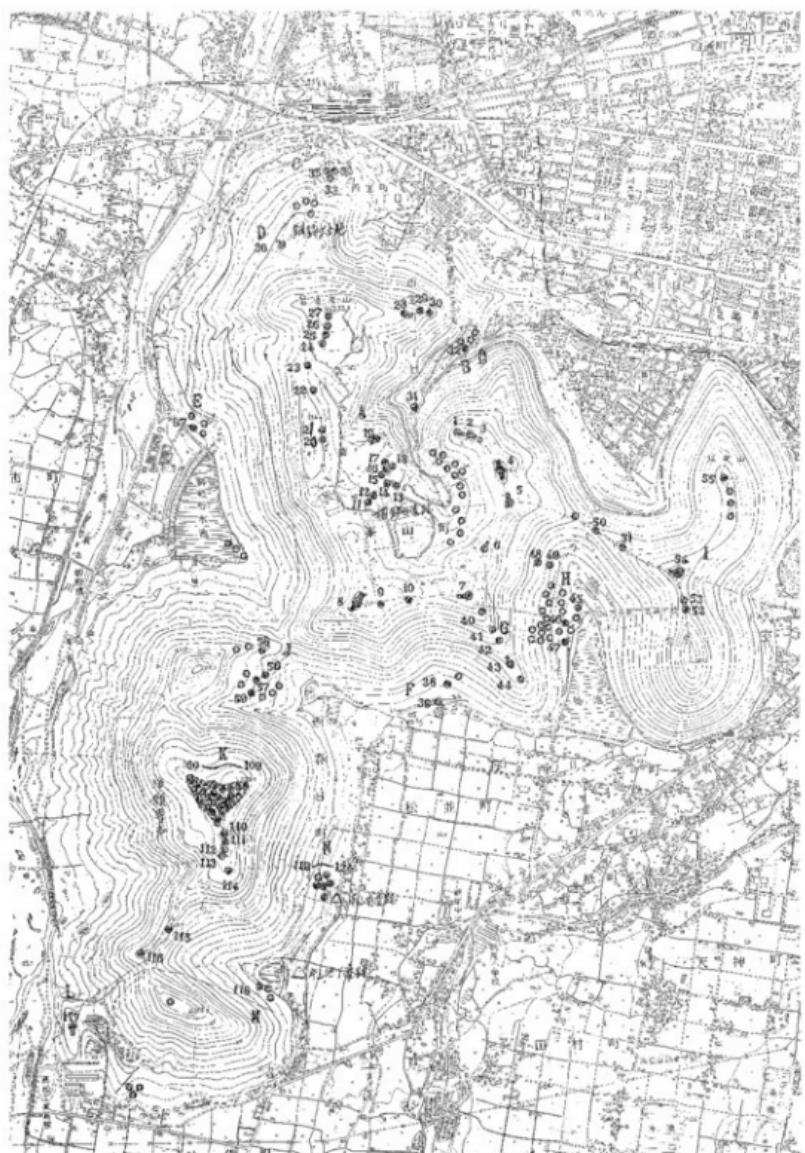
No.	名 称	所 在 地	所 有 者	地 目	立 地	墳 丘				
						形	態	平 面	計 測	高 さ
118	片山池1号墳	西春日町南山浦 1626-10	私 有	畠	山麓の北東に面した傾斜地	円	墳	直 径	7.00	0.50

N 南山浦古墳群

119	南山浦1号墳	西春日町南山浦	県 有	畠	東面する 斜面	円	墳	不 明	不 明
120	〃 2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
121	〃 3号墳	〃	私 有	〃	〃	〃	〃	〃	〃
122	〃 4号墳	〃	県 有	〃	〃	〃	〃	〃	〃
123	〃 5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
124	〃 6号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

内部構造	石室主軸 (開口方向)	石 室 計 測(cm)						遺 物	現 状
		全 長	玄 室	奥 室	通 道				
不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	須恵器のため墳丘は削平され石室の用材と思われる巨石が露出している。	

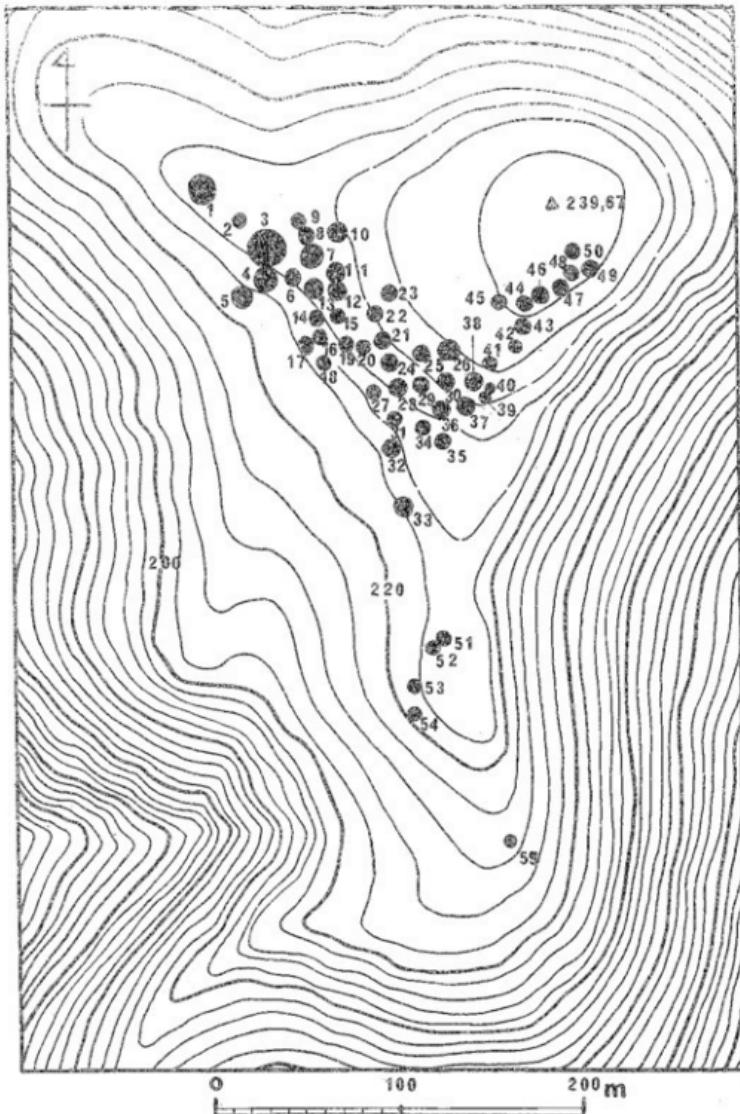
横穴式石室	(南)	860 以上	長巾	225	長巾	370	須恵器、土師器 鉄錠、鉄釘、 金鏡	県営住宅建設のため、発掘調査を完了し、石室はそのままの状態にしている。
"	(南)	766 以上	長巾	416	長巾	350	須恵器、鉄錠 金環、馬具	
"	(南東)	680 以上	長巾	460	長巾	220	須恵器、土師器、瓦片骨	
"	(南)	現在長 300	巾	120			須恵器、土師器、鉄錠	
"		:	:	:			未調査 後部天井石の一部破壊。	
"							未調査 奥壁、側壁のみ残存。	



石清尾山塊古墳分布図

●印 現存するもの

○印 京大報告に記載されているが現存しないもの



淨願寺山古墳群分布略図 (約1/3,500)

第三章 各古墳群の素描と主要古墳の概要

稻荷山古墳群 (No.50~55)

いわゆる石清尾山の東にある稻荷山の尾根上に存在する積石塚群である。前方後円墳一基を含む。これら個々の古墳の内容は全く判明していないが、おそらく先の猪鉢谷古墳群の(4)、(5)の積石塚群と並ぶ石清尾地域における前期古墳時代の首長集団を構成する一系列と考えられる。

No.50 稲荷山3号墳

立地 稲荷山と石船塚をつなぐ鞍部中間。現在の栗林トンネルの東側尾根上。海・平野共に眺望は良い。

墳丘 円墳、積石塚、直径約9m、高さ1m。

内部構造 竪穴式石室

遺物 かって、上師器が出土したと伝えられた（長町彰1920）京大報告に閉が載っている。それによれば、壺・高杯等が存在した。しかし、実見できないので詳細は不明。

現状 採石されたとのことで、今はその跡を留めるにすぎない。

問題点 積石塚の形態を取る小円墳のうち、その出土土器から年代の推定できる貴重な古墳である。この土器の時期は、猫塚出土の上師器よりは後出するものと思われる。

No.51 稲荷山1号墳

立地 稲荷山塚塚から標高200mの紫雲山に至るほほ中間地点に位置する。尾根の鞍部に存在し、海に対する眺望はよくない。

墳丘 円墳、積石塚、直径18m、高さ2.5m。石塊・移動が著しく、原形を留めていないので、墳形は確定できないが、今は円墳としておきたい。京大報告では前方後円墳としているが、「前方部」は現状では地山の露頭としか理解できない。現段階では前方後円とするには困難である。今後の発掘調査によって確定すべきである。

内部構造 不明

遺物 不明

現状 尾根道が墳丘を横断しており、また盗掘を受けたらしく、石塊の移動が激しい。

問題点 本墳が前方後円墳か円墳か本古墳群の理解の仕方が相違してくる。そうした意味では、今後十分な検討を要する。

No.54 稲荷山姫塚

立地 栗林公園の借景紫雲山のほぼ中間地点、いわゆる稻荷山と宝山の境界上に位置す

る。それは同時に樂林トンネル上部の鞍部より東に登った最高位であり、いわば3方向の分岐点にある。

墳丘 前方後円墳、積石塚、全長約58m、後円部約27m、高さ約8m、前方部長約31m、幅約18m、高さ約3.5mである。地形に制約されているため現在みるとかぎりでは、後円部は完全な正円ではなく、北東方向に歪んだ形状を示す。また、地盤が西方、すなわち前方部に向かって傾斜しているため、後円部からみれば前方部は低く狭長である。また、墳形維持のため非常な努力を傾むけている。特に前方部先端は後円部が2段、前方部の途中までは2段築成であるのに比べて、少なくとも6段階状に積みあげられている。こうした構築方法は、姫塚と類似する。

なお、外表面特に南側のくびれ部付近に上飾器片が散在していたことが京大報告に記されている。

内部構造 後円部に竪穴式石室の痕跡らしきものが見られるが、詳細は不明。なお前方部にもかかって主軸と平行して小竪穴式石室が存在していたと言われているが（笠井新也1933）確認できていない。

遺物 不明

現状 尾根道が後円部の一部を横切っているため墳丘が削られている。また前方部付近の段築が崩壊しかかっている。

問題点 本墳は、このグループ内においては現在判明する限りでは最も古いと思われる。しかも、前方後円墳という墳形を有しており、先の猫塚等と共に石清尾における首長集団を構成する。有力な集団の中核として存在している。また前方部先端の段築は今もその面影を留めており、今後とも絶対に保存されなければならない。

No55 稲荷山北端古墳

立地 稲荷山の最北端の尾根上に位置し、かっての海に面している。

墳丘 円墳、積石塚、長径約28m、短径20m、高さ2.5m。墳形は石塊の移動が激しいため明らかでないが、現状は円形というより多角形的形状を示している。これは円墳の両側に小さな造り出しが付いたため、このような形態になったとも考えられるが決め手がない。こうした墳形が地形の制約によるものか、あるいは意識的に定められたものかについては今後の課題である。埴輪・外衣の上器等については不明。

内部構造 不明

遺物 不明

現状 尾根道が墳丘を横切っている。また盗掘坑も存在し、段築も崩壊している。

問題点 この石清尾地域内にある円墳としては、最大規模を有している。その墳形とともに注目すべきものである。

なお、この古墳と細井山古墳の間にも2、3の積石塚が存在したらしい。現状では確認できなかった。さらに渠体トンネル鞍部のNo32古墳から西へ100m程の尾根上に土師器片の集中的に分布する個所があり、かっては、ここにも積石塚が存在したらしい。

野山古墳群 (No56~59) (No56~

本古墳群は、積石塚群と横穴式石室墳群とに大別できる。本来ならば、当然別個の古墳群と把握すべきであるが、記述の便宜上一括した。積石塚は、猫塚から西に急斜面を下った尾根鞍部西側に存在する。かっては、3基存在したが残存するもの1基のみである。内容の判明しているものは小円墳であって、内部主体は竪穴式石室である。遺物が判明していないので時期は明らかでないが、摺鉢谷古墳群の(1)、(2)等に類似するものと考えられる。

横穴式石室墳群は、この積石塚の南の小台地に存在する。かっては8基ほど存在していたらしいが、残存するものは3基である。石室の形態は、石清尾における一般的なものである。この古墳群も、内容的には、これまで紹介してきた石清尾における後期群集墳と同様なものとすることができる。

No56 野山1号墳

立地 東面した傾斜地の小丘陵上。

墳丘 円墳、径約12m、高さ約3.5m、盛土は地山の土と同じ。外表施設は不明。

内部構造 横穴式石室、石室全長635cm以上、玄室長310cm、巾210cm、高さ200cm以上、
羨道長325cm以上、羨道巾85cm、高さ105cm以上の片袖式（右袖・玄室から羨道部に向かって）石室である。奥壁は、一枚石が使用されているが、大きさが不足しているため両側に安山岩割り石をつめこんでいる。側壁は、横長の安山岩を基底部に据え、ほとんど持ち送りをせずに5段程度積みあげている。玄室天井石は2枚、羨道部は残存天井石3枚を使用。石室は南に開口し、主軸(N+16°-E)は等高線・方向と一致する。

遺物不明

現状 果樹園の中に入り、そのため墳丘は削平され、羨道部先端・奥壁付近が破壊されている。

問題点 遺物が判明していないので時期比定は困難であるが、石室形態から言って、石清尾における一般的な姿として捉えられる。

No58 野山4号墳

立 地 石清尾山（御坂山）から淨願寺山に至る鞍部切り通しの西側尾根の傾斜地。

墳 丘 円墳、積石塚、長径7m、短径5m、高さ約1.2mである。

内部構造 横穴式石室

遺 物 墳丘外壁に上器片が散在。厚さ1cm～0.6cmあり、外面はへら磨き、内面はへら削り～指捺形が施され、赤褐色を呈する。焼成胎土とともに良好。大形の壺の一部であろうか。

現 状 焼地化によって若干積石が削られている。また、中央部に大きな盜掘跡が存在する。

問 題 点 主要な前方後円墳。双方中円墳に統く時期の所産と思われる。なお、本墳から尾根東に30m程下た所に積石塚の痕跡らしきものがある。これがどうやら、京大報告で横穴式石室が図示されている古墳に当たるらしい。

淨願寺山古墳群（№60～№116）

主要な積石塚が分布する括鉢谷をめぐる山塊の南に、標高239.67mの源願寺山が存在する。淨願寺山は、北より標高208.1mの野山、標高239.67mの淨願寺山、標高169mの小山の三つの山塊よりなっている。このうち、古墳は主として中央部の標高239.67mの淨願寺山の山頂部の斜面一帯に分布するが、淨願寺山と小山とを結ぶ標高150m～160m程の尾根鞍部にも若干存在する。外表からの表面観察によれば、これらの古墳のほとんどは、径10m前後の小円墳であり、内部主体は横穴式石室である。特に淨願寺山山頂部付近に群集する古墳（№61～№110）は、判明する限りでは、すべて円墳であり横穴式石室を持っている。墳丘・石室・規模等には、若干の格差が認められるが、墳形上の差異は存在しない。遺物が全く判明していない現在、これら古墳相互間の質的差異を明らかにすることはできず、築造時期・追葬期間を限定することも極めて困難である。わずかに露出する横穴式石室の形態から、六世紀後半～七世紀前半にかけて、この山頂部に古墳としての機能を果たしていたと、漠然と推定する以外にない。この239.67m付近に存在する古墳は、およその数50基、それらは極めて近接して造られており、墳丘が累々と横たわっている。これらの古墳は群として一括して把握できるが、そのうちでも若干のグルーピングが可能である。しかし、現段階では、何も言えない。古墳の分布にも、何らかの規制がなされているかの如く馬蹄形にめぐり、中央に空地を残す。ともかくも、本古墳群は、平野部からの比高200m余の所に立地し、後期の群集墳の一般的な在り方と傾向を異なる。石清尾山古墳群中でも、山麓の後期群集墳とは立地において際立った対照を見せていく。しかし、他の他の内容になれば、ほとんど同じである。このような高地に築かれた理由は、今後の究明課題である。

淨願寺山古墳群には、先に若干述べたように中央部山麓の山頂付近に分布する50基程の群集

墳のほかに、これら古墳群の南部に若干の古墳が存在するが、その内容は明らかでない。

淨願寺山古墳群の特徴の一つに、そのまとまりの良さがあげられる。特に50基ほどの殆んどが盜掘を受けているとはいえ、かたまって墳丘まで残存する古墳群は、香川県ではほとんど存在しない。こうした意味でも、貴重な存在と言わなければならない。

No70 淨願寺山10号墳

立 地 山頂平坦部の南面する緩やかな斜面。

墳 丘 円墳、長径11m、短径8m、高さ2.7m。なお墳丘の周囲に空掘らしきものが見受けられる。

内部構造 横穴式石室、石室全長740cm以上、玄室長355cm、幅160cm、高さ160cm、羨道部巾100cm、高さ110cm以上の片袖式石室である。石室は、南方向（石室主軸N-16°-W）に開口している。奥壁は、一枚石を使用し、側壁には横長の安山岩を基底部に据え、その上段は、小形の割石をほとんど持ち造りせずに積みあげている。床面には、安山岩削石が敷かれている。

遺 物 不 明

現 状 羨道部先端部が破壊され、石室内に土砂が若干入り込んでいるが、その他は保存が良い。

問 題 点 50基程の群集墳中の1基である。本墳は、保存度の最も良い古墳の一つである。石室形態からは、群集墳の盛行る時期の所産としか言えない。他の古墳も多少の差異は存在しようが、本墳と類似するものと推定される。

L がめ塚古墳群 (No.117)

淨願寺山山塊の最南端部に位置する。現在は、そのほとんどが国立学校の校地内にあり、消滅して確認できないが、小形の前方後円墳1基を含む数基の古墳が存在したらしい。前方後円墳以外の古墳は円墳であって、立地から考えれば、後期の横穴式石室墳であった可能性が強い。したがって、この時期にまでは下るとは考えられない前方後円墳との間には、大きな空白期が存在するわけである。この古墳群の内容については、明らかにしない。

No117 がめ塚

立 地 淨願寺山山塊の最南端よりやや西。現在の香東川に面して標高52mの小丘陵がある。本墳は、かつてこの地に存在した。

墳 丘 前方後円墳、全長約25m、後円部径約15m、高さ2.5m。前方部の巾約9m、高さ1mの前方部のあまり発達しない前方後円墳であつたらしい。外表の施設は不明であるが、葺石は存在しなかったらしい。前方部を南に向いている。

内部構造 不明。破壊された時石が全然見あたらなかったと伝えられており、あるいは枯土

櫛のようなものであったからかもしれない。

遺 物 不 明

境 状 かつては原形を留めて存在していたが、学校の給水塔施設尾廻となり、墳丘が削平されてしまった。現在、墳丘の基底部がわずかに残存している程度で、内容が把握されないまま破壊された。

問 題 石清尾古墳群中、最南端最下位の前方後円墳であり、唯一の盛土前方後円墳である。内容が判明していない現在、時期比定は困難である。

M 片山池古墳群 (No.119)

淨願寺山の山頂部と標高169mの小山との形成する小さな谷間が山挾東側に存在する。その小谷間の北東に面した傾斜面に、かつて3~4基の古墳が存在したらしい。現在、かろうじて確認できる古墳は、1基にすぎない。この古墳も破壊の度合が著しいが、横穴式石室墳と推定される。他の古墳もおそらく同様な内容を持っていたと予想され、全体としては、この石清尾山塊の山麓に分布する後期の群集墳と変わりないと推定される。他の古墳もおそらく同様な内容を持っていたと予想され、全体としては、この石清尾山塊の山麓に分布する後期の群集墳と変わりないと推定される。なお、この古墳群のすぐ東には坂田庵守がかつて存在した。